《あらいぐまの Ballade》2000年

《薄暮の空間Ⅰ－2011》2011年

《オウムの憂鬱》1990年

《無花果》2018年

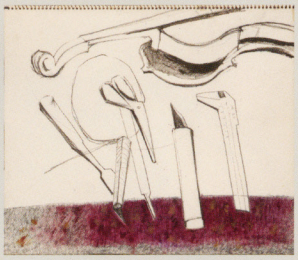
《鳥－1993》1993年

《閉館５分前－Ⅱ》2017年

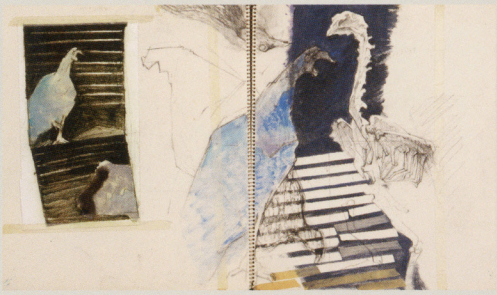
《椿姫》2017年

《バイオリン工房》2022年

《庭》2020年


《バイオリン工房》2022年

表面図版…中央：《椿姫》2017年
背景：《庭》2020年（部分）


《会話》2015年

福島修子展
［私の存在論］

福島修子は50年以上にわたって井の頭自然文化園に通ってきた。「通う」というにふさわしく飼育員にもよく知られていた。最初は風景を描くことを目的にご近所の文化園に、ということだった。動物が目当てだったわけではない。それが半世紀を超えた。そのあいだにはきっと多くの動物が生まれ死んでいったにちがいない。福島が見たサルが、福島を見たトリが、この世にあってこの世を去っていった。

私たちの知る、たとえば休日の薄曇りの動物園は、日常の延長線上にあるような幸福感がどんより垂れこめている。見る側と見られる側のあいだには靄がかかったような混沌がある。しかし福島の描く一見抽象と見まがう動物たちの空間は、そんな幸福感を底に沈めてまったくちがった風景を浮かび上がらせる。追い込まれた形態が向かう先は何処なのだろうか。

福島ならこう応えるのではないか。それはあなた、ご自分でお考えになってくださいな、と。とっくにおわかりでしょう、ということばはきっと飲み込まれるのだ。サルはサルであってサルではないのかもしれないし、ヒトはヒトであってヒトではないのかもしれない。いったい私たちはなにを拠り所に生きればよいのか。福島の作品の前に立てば、そんな無言の問いかけに晒される。

それは応じようのない問いかけであり、私たちはただその筆触をなぞる以外にない。しかし、ことばに変換できないその感情のありようこそが、描くことの、そして見ることの意味であって、決して作品の外に答えはない。だからこそ、対象化の無意味を思い知り、視覚がくり返しその筆触と色彩をなぞることで、私たち自身がそれを生きるという以外に道はない。見るとは描くことだと、私たちはとっくにわかっているのだ。

60年を超える画業から、後期の代表作９点とスケッチ３点を紹介します。具象に踏みとどまる画家の、独自の存在論とも呼び得る展覧です。
どうぞごゆっくりご鑑賞ください。

＊＊＊

福島修子
1936年、新潟県五泉市に生まれる。
1959年、女子美術大学芸術学部洋画科を卒業。
1965年、新制作展に出品はじめる。
1996年、新制作協会会員。

〒181-0013
東京都三鷹市下連雀
3-42-3 1階
JR三鷹駅南口より
徒歩5分（約350m）

［お問合せ］
TEL 0422-29-9868
（三鷹市公会堂）

https://mitaka-sportsandculture.or.jp/shg/

三鷹市桜井浜江記念市民ギャラリー
Mitaka City Hamae Sakurai Memorial Gallery